# 青年期の死に対する態度と生きがい感の関連

本郷　光[1]・岡本祐子[1]

The relationship between attitude toward death and the sense of life's value in adolescents

Hikari Hongo and Yuko Okamoto

The purpose of this research was to examine the relationships between attitude toward death and sense of life's value living in adolescents, with a focus on anxiety about death and the tendency to avoid death. The following hypotheses were tested: (1) Those with healthy attitude toward death approach it positively, and they will have low scores for anxiety about death and high scores for sense of life's value, and (2) those with a tendency to avoid death and refuse to accept it, will have low scores for anxiety about death and low scores for sense of life's value. Neither of these hypotheses was supported. However, we found a significant negative correlation between the factor of "death relief (a tendency which catches death with release from pain)" and sense of life's value, as well as a significant positive correlation between "anxiety about death" and "death avoidance".

Key words: death, adolescence, sense of life's value

## 問題

### 青年期の死に対する態度

死は，老年期だけに限定された主題ではない。青年が死と向き合うことは，その後の人生における基盤を形成し，より良い人生を送ることにつながると言われている (Hankoff, 1975 ; 丹下, 1999)。青年期の死に対する態度について，楠葉・橋爪・田神・小野・藤野・森下・藤本・浦田 (2012) は，青年は死に対するリアリティがなく，強い恐れを抱いていると述べている。また，青年の方が高齢者よりも強い死の恐怖を抱くことが，いくつかの研究で指摘されている (岡村，1983 ; 堀，1996 ; 田中・後藤・岩本・李・杉・金山・奥田・國次・芳原，2001)。加えて，テレビやインターネットなどのメディアからの情報の影響を受けやすいことも，青年期の死に対する態度の特徴である (前原・橘川，2008)。これは，自分とは関係性の薄い「第 3 人称の死」，たとえばニュースで報道される死の情報や，テレビドラマやゲームの中の虚構の死などが大量に発信され，体験されている (小

[1] 広島大学大学院教育学研究科

松，2000) ことと無関係ではないと考えられる。

**生と死の関連**

Hankoff (1975) の知見でも示唆されているように，死について論じる際は生に関する視点を含めることが必要である (田口・三浦，2012)。しかし，死に対する態度と生に関する視点との関連をみた研究は多いとは言えない。その中でも Durlak (1972) は，大学生と高校生を対象とした研究で，死の不安が高いことと，QOL (Quality of Life：生命や生活の質) の低さの関連を指摘している。Frankl (1965) は，人生に大きな目的と意味を見出している人は，死の不安が低く，死を受容し肯定的に捉える傾向にあると述べている。したがって，生への価値観が明確であり，人生が充実していることが，人生が終わることへの不安を低める可能性が示唆される (田口・三浦，2012)。これに加えて，大石・安川・濁川・飯田 (2007) は，死後の生や生まれ変わりなどに関する死生観が，生きがい感の高さと関連すると述べている。一方，小谷 (2004) は，死を恐怖と思わない人は，生活満足度が高い人と低い人のどちらにも多くみられると指摘し，生活満足度が低く，死を恐怖と思わない人については，背景に現実逃避の意識が働いていると推察している。さらに，斎藤・林・藤野 (2002) は，自尊感情，自己価値が高い青年は，自分自身の肉体や精神の喪失である死を肯定的に捉えることができず，強い恐怖を覚えると主張している。また，渡辺・平井 (1999) は，死に対して強い恐怖を持ち，死に関心を持っている青年は，すでに職業をひとつにしぼっているか，自分の職業選択に自信を持っているのに対し，死への恐怖・不安が強くない人は，職業選択について考えたときに不安になり，情緒的に混乱する傾向があると述べている。渡辺・平井 (1999) は，このような傾向がみられた理由について，「死を恐れている人は，生の質をできるだけ向上させたいと願い，精一杯自分らしく生きようとするため，自分らしさを表現する一つの手段である職業について，積極的に考えようとしていると言えるのではないか」と推測している。

このように，死と向き合うことは恐怖や不安といった否定的な側面と，肯定的な側面の両方を持ち合わせている。近年では，1997 年の臓器移植法施行に伴う (2009 年改正)，新たな死や命のあり方について考える場として，学校や家庭におけるデス・エデュケーションの重要性が注目されている。Deeken (1986) は，死を人生最大の試練と位置付け，教育や訓練によって心構えをした上で死に臨むことが大切であると述べ，「デス・エデュケーションの 15 の目標」を掲げている。西山・石田 (2011) はデス・エデュケーションに役立つ映画の検討を行った。そこで，デス・エデュケーションの目標として，Deeken (1986) の掲げた目標の一つである「時間の貴重さを発見し，人間の創造的次元を刺激し，価値観の見直しと再評価を促すこと」を参考に，「自己の命の有限性，時間の貴重さを認識すること」,「これまでの生き方に対する反省と，今後の生き方についての思索がなされること」,「自己の命の大切さ，今生きていることのありがたさを認識すること」の 3 つを設定している。これらの目標は，デス・エデュケーションの重要性を示すとともに，死に対する態度の変容がポジティブな効果をもたらすことを示唆している。しかし，死をタブー視する風潮や，死についての様々な不快な感情に対する倫理的配慮の難しさなどから，デス・エデュケーションは看護系大学・専門学校を中心に行われている (糸島，2005；園田・上原，2007) のが現状であり，家庭やその他の学校において十分に理解され，普及しているとは言い難い。

**先行研究の問題点と本研究の目的**

先行研究においては，死の恐怖・不安 (Durlak，2000)，または死後の生や生まれ変わりを信じるか (大石，2007) というように，死に対する態度の一側面ばかりが注目され，他の側面については検討されていない。また，金児 (1994) や小谷 (2004) が指摘するように，本当に死の不安を感じていない人と，死に対する感情を抑圧したり，死に無関心でいようとする人の判別が困難であった。金児 (1994) はこの問題点について，死に対する態度を多面的に測定する尺度を用いることによって，低得点者の説明が可能になると述べている。そこで本研究では，死の恐怖・不安や死からの回避，死への関心など死に対する態度をさまざまな側面から測定する尺度を用いて，青年期の死に対する態度と生きがい感の関連を検討することを目的とする。

**仮説**

Deeken (1986) のデス･エデュケーションの 15 の目標の一つである「極端な死への恐怖を和らげ，無用の心理的負担を取り除くこと」に沿って考えると，デス・エデュケーションを通じた死との対決や思索によって，過剰な死の不安を和らげ，適切な死への心構えを獲得することができると推測できる。また，西山・石田 (2011) のデス・エデュケーションの目標に従えば，死をむやみに拒絶せず，積極的に向き合えている人は，そうでない人に比べて時間の有限性を意識し，有意義な生活を送ることができていると考えられる。さらに，このような人は，よりよい生き方とは何かを，常に検討し，自己の命の大切さや生きていることのありがたみを感じていると考えられる。また，死の不安・恐怖に着目すると，小谷 (2004) が述べているように，死の不安が低くても，現実逃避をし，死について考えないようにしたり，死に対する感情を抑圧している人は生活満足度が低いと考えられる。以上のことから，本研究では次の仮説を設定する。仮説①死についてよく考え，積極的に向き合えている人ほど，死に対する恐怖・不安が低く，生きがい感が高い。仮説②死に対する恐怖・不安が低い人のうち，死を回避，拒絶する傾向の強い人は，生きがい感が低い。

## 方法

**参加者**　A 大学の学生 191 名 (男性 85 名，女性 105 名，不明 1 名)。平均年齢は 20.2 歳 (不明 2 名，*SD*=1.38) であった。

**手続き**　質問紙法を用いた。108 名は集合調査で，83 名は調査者が個別に依頼する形で実施した。

**質問紙の構成**　(1) 死に対する態度，(2) 生きがい感，(3) 自由記述，(4) フェイスシートであった。

**死に対する態度の測定**　臨老式死生観尺度 (平井・坂口・安部・森川・柏木，2000) を用いた。27 項目，7 件法。

**生きがい感の測定**　青年期の生きがい感スケール (近藤･鎌田，1998) を用いた。 31 項目，3 件法。

**自由記述**　今後の研究につながる情報収集のために，死についての考えを自由に記述させた。

**フェイスシート**　性別，年齢，学年，学部・学科を尋ねた。

## 結果

**臨老式死生観尺度の因子分析**

因子構造の確認のために，探索的因子分析（主因子法，プロマックス回転）を行ったところ，平井他（2000）の因子内容と同様に「解放としての死」,「死への恐怖・不安」,「死からの回避」,「人生における目的意識」,「死後の世界観」,「寿命観」,「死への関心」の 7 つの下位因子に分かれた。α係数は.73-.92 であり，信頼性が確認された。結果を Table 1 に示した。

Table 1

臨老式死生観尺度の因子分析の結果 (主因子法，プロマックス回転)

| | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 第1因子　解放としての死 (4項目) α =.92 | | | | | | | |
| 17 死は痛みと苦しみからの解放である。 | .935 | .049 | .000 | .012 | .008 | .001 | -.089 |
| 23 私は死をこの人生の重荷からの解放と思っている。 | .894 | .019 | -.029 | -.031 | -.053 | -.015 | -.012 |
| 13 私は，死とはこの世の苦しみから解放されることだと思っている。 | .890 | -.004 | -.037 | -.063 | -.027 | -.078 | .060 |
| 16 死は魂の解放をもたらしてくれる。 | .721 | -.117 | .117 | -.020 | .164 | .099 | -.032 |
| 第2因子　死への恐怖・不安 (4項目) α =.89 | | | | | | | |
| 26 死は恐ろしいものだと思う。 | .080 | .924 | -.049 | -.022 | .022 | -.003 | -.054 |
| 7 死ぬことがこわい。 | -.032 | .856 | -.018 | .027 | .047 | -.013 | -.092 |
| 5 自分が死ぬことを考えると，不安になる。 | -.013 | .660 | .149 | .014 | .034 | -.061 | .105 |
| 11 私は死を非常に恐れている。 | -.125 | .654 | .176 | -.145 | .030 | .015 | .262 |
| 第3因子　死からの回避 (4項目) α =.86 | | | | | | | |
| 3 私は死について考えることを避けている。 | -.025 | -.129 | .907 | -.052 | .014 | -.021 | .019 |
| 20 死は恐ろしいのであまり考えないようにしている。 | .160 | .235 | .730 | .068 | -.044 | -.045 | -.115 |
| 1 どんなことをしても死を考えることを避けたい。 | -.128 | .104 | .624 | .045 | -.004 | .056 | -.100 |
| 25 私は死についての考えが思い浮かんでくると、いつもそれをはねのけようとする。 | .051 | .224 | .601 | .056 | -.083 | .059 | .049 |
| 第4因子　人生における目的意識 (4項目) α =.83 | | | | | | | |
| 18 私は人生の意義，目的，使命を見出す能力が十分にある。 | -.017 | .070 | -.127 | .843 | .040 | .038 | -.035 |
| 21 私は人生にはっきりとした使命と目的を見出している。 | .032 | -.006 | .009 | .825 | -.118 | .029 | .026 |
| 24 私の人生について考えると，今ここにこうして生きている理由がはっきりとしている。 | -.028 | -.155 | .186 | .719 | -.002 | -.048 | .143 |
| 8 未来は明るい。 | -.167 | -.004 | .027 | .571 | -.168 | -.043 | -.173 |
| 第5因子　死後の世界観 (4項目) α =.80 | | | | | | | |
| 14 死後の世界はあると思う。 | -.029 | -.135 | .144 | -.035 | .912 | -.084 | .119 |
| 19 人は死後，また生まれ変わると思う。 | .031 | .072 | -.077 | .096 | .643 | -.053 | -.001 |
| 6 世の中には「霊」や「たたり」があると思う。 | -.034 | .268 | -.191 | -.003 | .637 | .067 | -.097 |
| 27 死んでも魂は残ると思う。 | .107 | -.024 | .008 | -.042 | .633 | .102 | .035 |
| 第6因子　寿命観 (3項目) α =.83 | | | | | | | |
| 15 人の寿命はあらかじめ「決められている」と思う。 | .029 | .029 | .017 | .007 | -.023 | .978 | .004 |
| 4 寿命は最初から決まっていると思う。 | -.039 | -.017 | -.038 | .019 | -.072 | .908 | .076 |
| 9 人の生死は目に見えない力 (運命・神など) によって決められている | -.008 | -.114 | .077 | -.046 | .266 | .505 | -.092 |
| 第7因子　死への関心 (4項目) α =.73 | | | | | | | |
| 12 自分の死について考えることがよくある。 | .005 | .025 | -.006 | -.025 | -.024 | .066 | .815 |
| 2 「死とはなんだろう」とよく考える。 | -.026 | -.051 | -.083 | -.009 | .048 | -.066 | .806 |
| 10 身近な人の死をよく考える。 | -.105 | .089 | .017 | -.010 | .023 | .035 | .479 |
| 12 家族や友人と死についてよく話す。 | .260 | .075 | -.088 | .321 | .036 | .027 | .373 |
| 因子間相関 | 1.000 | | | | | | |
| | -.181 | 1.000 | | | | | |
| | -.059 | .565 | 1.000 | | | | |
| | -.124 | .064 | .140 | 1.000 | | | |
| | .121 | .023 | .060 | .168 | 1.000 | | |
| | .288 | .029 | .034 | .011 | .338 | 1.000 | |
| | .305 | .145 | -.049 | .086 | .136 | .203 | 1.000 |

**相関係数の算出**

臨老式死生観尺度の各下位因子と生きがい感の関連を検討するために，各下位因子得点と生きがい感得点の相関係数を算出した。結果を Table 2 に示した。生きがい感には，「解放としての死」が有意な負の相関，「人生における目的意識」が正の相関を示した。臨老式死生観尺度の下位因子同士では，「死への恐怖・不安」と「死からの回避」が有意な正の相関を示した。

**分散分析**

仮説①「死についてよく考え，積極的に向き合えている人ほど，死に対する不安・恐怖の得点が低く，生きがい感の得点が高い」を検討するために， 2 (「死への関心」因子の得点の高・低) ×2 (「死への恐怖・不安」因子の得点の高・低) の 2 要因分散分析を行った。高群・低群の分類はそれぞれの因子の得点の平均値を基準にして行った。それぞれの群の人数は関心高‐恐怖・不安高群 73 名，関心高‐恐怖・不安低群 21 名，関心低‐恐怖・不安高群 71 名，関心低‐恐怖・不安低群 26 名であった。また，各群の生きがい感得点の平均は，順に 2.40 点，2.30 点，2.38 点，2.33 点であった。分散分析の結果を Table 3 に示す。分析の結果，各要因の有意な主効果，および交互作用はみられなかった。

次に，仮説②「死に対する恐怖・不安の得点が低い人のうち，死を回避，拒絶する傾向の強い人は，生きがい感の得点が低い」を検討するために， 2 (「死への恐怖・不安」因子の得点の高・低) ×2 (「死からの回避」因子の得点の高・低) の 2 要因分散分析を行った。高群・低群の分類はそれぞれの因子の得点の平均値を基準にして行った。それぞれの群の人数は恐怖・不安高‐回避高群 89 名，恐怖・不安高‐回避低群 55 名，恐怖・不安低‐回避高群 6 名，恐怖・不安低‐回避低群 41 名，であった。また，各群の生きがい感得点の平均は，順に，2.44 点，2.31 点， 2.48 点，2.30 点であった。分散分析の結果を Table 4 に示した。分析の結果，各要因の有意な主効果，および交互作用はみられなかった。

Table 2

臨老式死生観尺度の下位因子得点と生きがい感得点の相関係数

| | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 解放としての死 | - | | | | | | | |
| 死への恐怖・不安 | -.157* | - | | | | | | |
| 死からの回避 | -.076 | .594** | - | | | | | |
| 人生における目的意識 | -.186* | .028 | .156* | - | | | | |
| 死後の世界観 | .117 | .066 | .023 | .161* | - | | | |
| 寿命観 | .263** | .006 | .028 | -.001 | .341** | - | | |
| 死への関心 | .260** | .186** | -.070 | .095 | .154** | .191** | - | |
| 生きがい感 | -.254** | .065 | .119 | .687** | .131 | -.082 | .033 | - |

* $p$ >.05, ** $p$ >.01

Table 3

仮説①に関する分散分析の結果

| 変動因 | *SS* | *df* | *MS* | *F* | *p* |
|---|---|---|---|---|---|
| 関心 (A) | .001 | 1 | .001 | .004 | *n.s.* |
| 恐怖・不安 (B) | .185 | 1 | .185 | 1.288 | *n.s.* |
| A×B | .025 | 1 | .025 | .177 | *n.s.* |
| 誤差 | 26.860 | 187 | .144 | | |
| 全体 | 27.069 | 190 | | | |

Table 4

仮説②に関する分散分析の結果

| 変動因 | *SS* | *df* | *MS* | *F* | *p* |
|---|---|---|---|---|---|
| 恐怖・不安 (A) | .002 | 1 | .002 | .017 | *n.s.* |
| 回避 (B) | .427 | 1 | .427 | 3.046 | *n.s.* |
| A×B | .015 | 1 | .015 | .106 | *n.s.* |
| 誤差 | 26.187 | 187 | .140 | | |
| 全体 | 27.069 | 190 | | | |

## 考察

本研究の目的は，死に対する恐怖・不安と，死を回避・拒絶する傾向の 2 側面に注目して，大学生の死に対する態度と，生きがい感の関連について検討することであった。

**各下位因子と生きがい感の関連**

臨老式死生観尺度の各下位因子得点と，生きがい感得点の相関係数を算出したところ，「解放としての死」と生きがい感の間に負の相関がみられた。これは，この世の苦しみや重荷から解放される手段として「死」に期待することが，自分の日常生活への評価を否定的なものにしているためであると考えられる。あるいは，日常生活に満足することができないため，人生を終えてこの世の暮らしから解放されることに期待する，というように逆の因果関係の可能性も考えられる。また，「人生における目的意識」は生きがい感との間に正の相関を示したが，2 つの変数は同じような概念を測定しており (例)「未来は明るい」と「私は将来に希望を持っています」)，関連があるのは当然であると考えられる。

死に対する態度尺度の下位因子においては，「死からの回避」と「死への恐怖・不安」との間に正の相関がみられた。恐怖・不安の対象を回避することは，どのような対象においても生じ得る反応であると考えられる。また，この結果について Kirk & Rouf (2004) の知見を踏まえると，死についての考えを避けることは，一時的に死への恐怖・不安を低めても，恐怖・不安そのものへの取り組みはなされないままであるため，恐怖・不安が持続し，再び回避行動をとることにつながると推測される。したがって，死への恐怖・不安と死についての考えを避けることは，互いに影響を及ぼしあう循環的な関係にある可能性が示唆される。

**仮説①，②の検討**

分散分析の結果，有意な各要因の主効果，および交互作用はみられず，仮説①，②は支持されなかった。その理由としては，生きがい感が高い人の中で，死への恐怖・不安の効果が個人間で異なっていたことが考えられる。Durlak (1972) は，大学生と高校生を対象とした研究で，死の不安が高いことと，QOL の低さの関連を指摘している。一方，渡辺・平井 (1999) は，死の不安と職業選択の関連について，「死を恐れている人は，生の質をできるだけ向上させたいと願い，精一杯自分らしく生きようとするため，自分らしさを表現する一つの手段である職業について，積極的に考えようとしていると言えるのではないか」と推測している。したがって，死の恐怖・不安が低い人でも，死を恐れているために，精一杯自分らしく生きようとしている人も生きがい感が高くなる場合が考

えられる。本研究で用いた「死からの回避」，「死への関心」因子は死への恐怖・不安の効果の違いを区別できなかったと推測される。また，生きがい感スケールが「はい」，「どちらでもない」，「いいえ」の 3 件法であり，生きがい感の高低を詳細に測定できなかったことも原因として考えられる。今後は，用いる尺度を再度吟味した上で，死への恐怖・不安の効果を区別できる変数で検討を行うことが必要である。自由記述においても，「おそろしい。死があることはつまり，生の一回性を意味するので，出来る限りより善い生き方をしたいと考える」，「いつか必ずやってくるもの。人は生きつづける方がつらいと思うから，死という 1 番の目的を持って，人生の一時の楽しさ，嬉しさに喜びを感じたり，悩みをとことん悩んだり，毎日精一杯すごせるのだと思う」といった仮説に合致した記述がみられ，引き続き本研究で設定した仮説について検討する必要があると考えられる。

## 引用文献


Deeken, A. (1986). 死への準備教育の意義:生涯学習として捉える Deeken, A.・メヂカルフレンド社編集部 (編) 死への準備教育:第 1 巻 死を教える メヂカルフレンド社 pp.1-62.

Durlak, J. A. (1972). Relationship between individual attitudes toward life and death. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, **38**, 463.

Frankl, V. E. (1965). *The doctor and the soul.* New York: Knopf.

堀　薫夫 (1996). 大学生と高齢者の老いと死への意識の構造の比較 大阪教育大学紀要　IV 教育科学, **44** (2), 185-197.

糸島陽子 (2005). 死生観形成に関する調査-看護学生と大学生の比較 京都市立看護短期大学紀要, **30**, 141-147.

Hankoff, L. D. (1975).　Adolescence and the crisis of dying. *Adolescence*, **10** (39), 373-389.

平井　啓・坂口幸弘・安部幸志・森川優子・柏木哲夫 (2000). 死生観に関する研究-死生観尺度の構成と信頼性・妥当性の検証- 死の臨床, **23**, 71-76.

金児暁嗣 (1994). 大学生とその両親の死の不安と死観 人文研究, **46** (10), 537-564.

Kirk, J.& Rouf, K. (2004). Specific phobias. In: J. Bennett-Levy, G. Butler, M. Fennnel, A. Hackmann, M. Mueller & D. Westbrook (Eds). *Oxford Guide to Behavioural Experiments in Cognitive Therapy.* Oxford: Oxford University Press.

小松万喜子 (2000). 日本の現代の青年の死生観とその教育課題 佛教大学大学院紀要, **28**, 99-114.

近藤　勉・鎌田次郎 (1998). 現代大学生の生きがい感とスケール作成 健康心理学研究, **11** (1), 73-82.

小谷みどり (2004). 死に対する意識と死の恐れ 第一生命経済研究所ライフデザイン研究本部ライフデザインレポート 2004.5, 4-15.

楠葉洋子・橋爪可織・田上純子・小野真奈美・藤野裕子・森下　暁・藤本裕二・浦田秀子 (2012). 医療系大学 1 年生がイメージする良い死 保健学研究, **24** (2), 17-24.

前原佳奈・橘川真彦 (2008). 大学生の死に関する経験による人格的発達：共感性・死に対する態度

の視点から 宇都宮大学教育学部教育実践総合センター紀要, **31**, 293-300.

西山美聡・石田　弓 (2011). デス・エデュケーションに役立つ映画の検討 広島大学大学院心理臨床教育センター紀要, **10**, 100-115.

岡村達也 (1984). 「死に対する態度」の研究：青年と成人との比較 東京大学教育学部紀要, **23**, 331-343.

大石和男・安川道雄・濁川孝志・飯田史彦 (2007). 大学生における生きがい感と死生観の関係 –PILテストと死生観の関連性- 健康心理学研究, **20** (2), 1-9.

齋藤英子・林かおり・藤野文代 (2003). 大学生の死のイメージに関する研究：TEG・Self-Esteem・身近な人の死の経験による分析 群馬保健学紀要, **23**, 49-53.

園田麻利子・上原充世 (2007). ターミナルケアの授業における学生の死生観に関する検討 鹿児島純心女子大学看護栄養学部紀要, **11**, 21-35.

田口香代子・三浦香苗 (2012). 高齢者の生への価値観と死に対する態度 昭和女子大学生活心理研究所紀要, **14**, 57-68.

田中愛子・後藤政幸・岩本　晋・李　恵英・杉　洋子・金山正子・奥田昌之・國次一郎・芳原達也 (2001). 青年期および壮年期の「死に関する意識」の比較研究 山口医学, **50** (4), 697-704.

丹下智香子 (1999). 青年期における死に対する態度尺度の構成および妥当性・信頼性の検討 心理学研究, **70**, 327-332

渡辺美那子・平井　啓 (1999). 青年の職業観と死生観との関連性について 大阪大学臨床老年行動学年報, **4**, 26-36.